

【ものづくり 人づくり 地域づくり】福島は今 (1)

福島は今・・・

まるで普通の町並みなのに 人ひとりいない町の不気味さ 時間が止まったままの街 人々がいてこそその町が・・・

3/31 ~ 4/1 いわきから富岡町へ 福島視察と現地の方との交流 (東海第二訴訟団)



人ひとりもない町の不気味さ

福島第一原発から 20km 離れた広野町の駅前通り
東海第二原発で言えば、ひたちなかから水戸のエリア



津波が襲ったあとの原発避難で
捨てられたままの富岡駅前
福島原発から 10km の富岡駅前通り

【今月の予定】

【内外の催し】

- 4. 17 (木) 東海第 2 原発差止訴訟第 2 回口頭弁論
(水戸地裁 301 号大法廷)
- 4. 21 (日) 「被ばくから 2 年、どう生きる? 茨城・福島の私たち」
諦めない・忘れない・声をあげよう、4.21 ディスカッション
小川仙月さんが問題提起 (つくば市春日交流センター)

【生協運営】

- 4. 15 (月) 平和の集い委員会 (本部)
- 4. 19 (金) 牛久地区組合員懇談会
- 4. 22 (月) つくば地区組合員懇談会 (小野川公民会)
- 4. 23 (火) 我孫子地区組合員懇談会
- 4. 24 (水) 2012 年度総代さんの懇談会 (本部)
- 4. 26 (金) 第 12 回常総生協理事会

【福島は今・・・サイレント・スプリング、サイレント・ウォー】

ふつうの商店街、ふつうの住宅街、ふつうの田舎の風景、 なのに人が一人もいない町の不気味さ・異様さ

見えない、匂わない、聞こえない 放射能の不気味な世界 人々の時が止まり、自然の時間が静かに流れる・・・

3/31～4/1、東海第二原発差止訴訟団で福島現地視察とあわせて、いわきに避難あるいは残って東電への補償を求めて訴訟を起こした原告や弁護士さんからお話を聞いてきました。

バスに同乗して案内してくれたのは原告団長で地元の医療生協理事長の伊東さん。原発の危険を訴え、チェルノブイリにも行き、長く原発に反対してきたのに、それが現実になった時、どうしてよいか考えられなかったと。



四倉～久ノ浜～広野



船の墓場となっている四ツ倉港



久ノ浜を通る国道6号線。3/12は避難の車で渋滞。何時間もかけてようやくいわきに避難。しかし、ようやくたどり着いたいわきにはもうすでに人がほとんどいなかった。

広野町～楢葉町

前線基地として東電に占拠されたJヴィレッジ



東電が130億円を寄付して作ったJヴィレッジ
結局東電がクワイチ収拾前線基地として占拠



東電福島復興本社



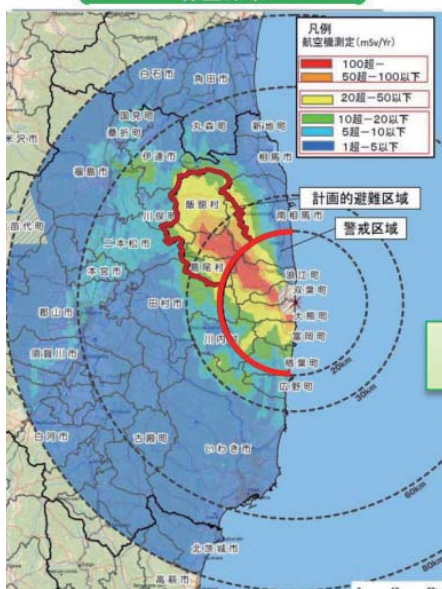
サッカーグラウンドは福島第一作業員の車がびっしり

船の墓場となっている四倉港から久ノ浜を通る国道6号線は、原発震災後沿岸の唯一の避難路として、避難民の車で渋滞して動けなかった。いわきまで普段は30分のところ半日かけての避難だった。

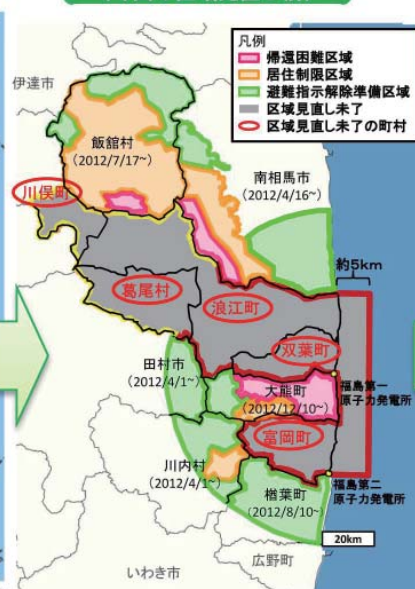
広野までの道々は、家々はあるのに人っ子一人歩いていない静まり帰っている不気味さ。福島第一原発から20-30km圏内でもまったく人を見ることがなかった。家の中は地震後に取る物もとりのあえす慌てて避難した跡。家がネズミの巣になっている。

東電が福島県に130億円寄付して作ったサッカー施設、広野の「Jヴィレッジ」は、結局原発事故収拾の前線基地として東電の復興本社が占拠し、下請け労働者が集められてバスに乗せられてF1に送り込まれてゆく。

平成23年4月29日時点の
線量分布



平成24年12月10日時点
(今回の区域見直し前)



平成25年4月1日以降
(今回の区域見直し後)



富岡町 津波を受けたまま放棄される富岡駅と駅前通り



津波で流されたままの富岡駅ホーム



駅舎はあとかたもなく、流されてきた車が放置されている



駅前商店街もそのままの状態



原発から5kmの富岡町。5日前に昼間の立入が許可された。

津波でさらわれてそのままに放置されている富岡の駅と駅前商店街。

帰宅困難区域の封鎖線境界は4 $\mu\text{Sv/h}$ 。年間35ミリシーベルトの被ばく。その「通り」こそ桜で有名な「夜の森」。

ここに花見に来てもらおうと、桜の皮を剥ぎ、土盛りをして清掃し、観光客を呼ぼうとする人の悲しさ。

バリケードとフェンスから向こうは帰宅困難区域。手前は暗黙のうちに帰宅を半ば強制させられかのように・・・。「境界」ということの意味は人々の生活の分断と強制。

帰宅困難区域との境界 桜の名所「夜/森」・・・ 皮を剥がされた桜並木



夜の森の桜並木



バスのモニターに映しだされる線量は4.7 μSv に達した



福島第二原発への入口



閑静な住宅街はフェンスと バリケードで封鎖され



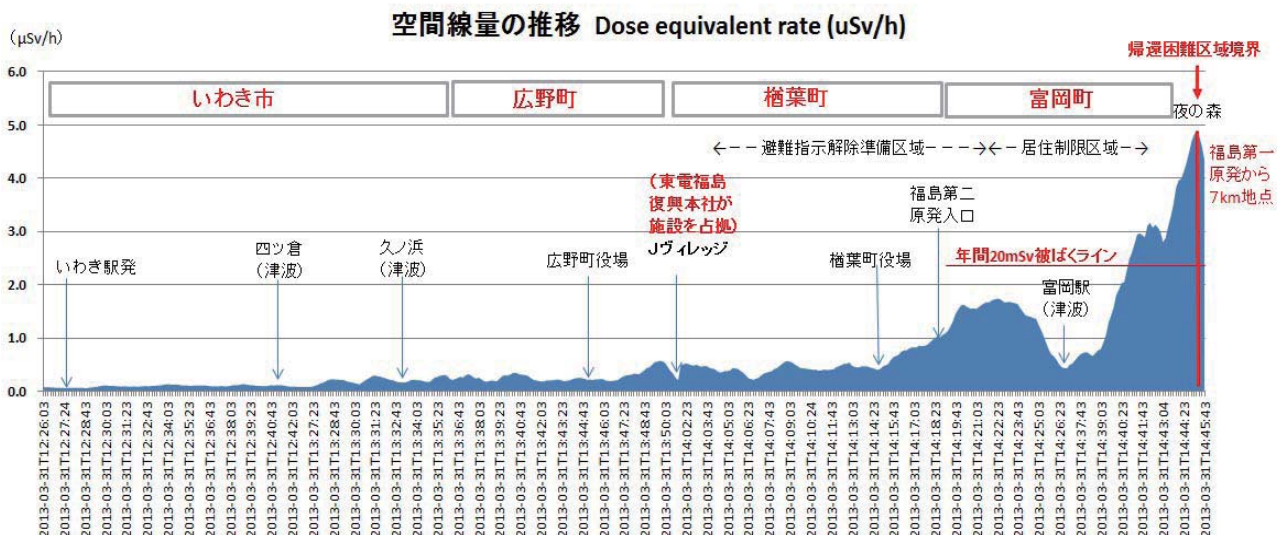
道路封鎖のバリケード
右側の住宅街が
帰宅困難地域



家の前に張られた
立入禁止の
フェンス



住宅街のクリニック



毎年士別から届く豚のモモ丸焼き、サマーキャンプありがとう

追悼 北海道 士別農園元代表 殿山さん

専務理事 柿崎 洋

追悼 士別農園 殿山伊智朗さん



じゃがいもや玉ねぎなどの農作物、「とんちゃん焼肉」などの手作りの加工品でおなじみの士別農園の前代表、殿山伊智朗さんが先月亡くなされました。67歳でした。昨年の10月に体調を崩し、精密検査を受けたところ胆嚢がんと診断。12月に北海道大学

病院で摘出手術を受け、手術は無事成功し復帰に向けて療養していましたが回復が思わしくなく、残念な結果となりました。

殿山さんは昭和22年に農家の4人きょうだいの長男として生まれました。士別東高校、農民大学、農業学園を経て、昭和47年に農園設立に参加。今ではそれぞれが家庭を持っていますが1男、2女を設け、代表理事を11年間務め農園には無くてはならない存在でした。

10月に入院の知らせを聞き、お見舞いに行く相談を農園にしたところ「実は、あまり姿を見られたくないよなんだ」と現代表から伺い、遠くから回復をお祈りしていました。昨年夏の「士別農園サマーキャンプ」に参加した組合員と子ども達にも「殿山さんに応援メッセージ送ろう!」と呼び掛けたところ、子どもたちは色とりどりのペンで一生懸命メッセージを書き、一冊のアルバムにしました。葬儀ではお母さんから「ベットでお父さんいつも見ていました。とても喜んでいました。皆さまにどうかくれぐれもよろしくお伝えくださいね」とお言葉頂きました。



秋の生協まつりで毎年好評であつという間に売り切れてしまう「豚の丸焼き」。「職員もちゃんと食べろよ!だから2本送っとくから。職員と組合員の分ね」と毎年欠かさず特大の豚モモを送っていただきました。また、毎年時間が許す限り生協の事務所を訪れ、職員と交流し新人の職員はじめみんなを激励してくれました。

昨年夏の「常総生協サマーキャンプ」。7人の子ども達とお世話役の組合員と職員で士別農園を3泊4日



で訪れました。その年の冬に殿山さんが来協した時に「常総生協の子どもたちを放射能の心配の無いところでのびのび遊ばせたい」と相談したところ、「ぜひ来てよ。農園の事務所の2階なら広いから寝泊まりできるよ。ただ、身の回りのことは自分たちでするんだよ」と快諾。「あんまり手出ししないよ」と言っていたものの、いざ訪問すると毎日気にかけて頂き、子ども達を朝のラジオ体操、散歩、畑の収穫体験と連れ出してくれました。放つとくことができない、優しい殿山さんでした。

士別農園も世代交代が始まっており、設立メンバー家族の2代目の息子さんも働いています。

今後も殿山さんたち先輩の情熱と意思を受け継ぎながらも、何でも言い合える関係でいたいと思います。殿山さん、ありがとう。みんな、殿山さんの優しさをいつまでも忘れません。

合 掌



殿山さんの回復を祈って子どもたちから送られたメッセージ

【士別農園】昭和47年、士別の農業勉強会で顔を合わせていた当時の青年たちが、「勉強会でなく実践に移ろうよ」となり、そのうちの6家族が現在農園のある士別市多寄町に土地を借り、同じ間取り、同じ部材、同じ工法でそれぞれの家を建てて開始。中には家出同然で参加した人もいたとのこと。

昭和51年には全面的に給料制に移行。給料の半分は農園に入れ、そこから農園の子どもたちの教育費や公共料金を支払うしくみ。言葉だけでなく、実際の制度としても全員を「ひとつの家族」ととみなしているのが士別農園の大きな特徴です。

農産、加工、畜産、総務などの部門に夫婦に関係なく適材適所に配置。各人が自分の担当部門に責任を持ちその部門を仲間頼らず自分で全うするのが基本姿勢。お互いに言いたいことも必ず言おう関係でもあり、「けっこう厳しいんだよ」と生前の殿山さん。